F2-32

地方都市における日常景を活かした景観形成方策に関する研究
—生活領域内外における山岳の視対象・視点場に着目して—

A Study on the Landscape Planning that makes use of the Ordinary View in Local City
-Focus on mountain objects and viewpoints in the inside and the outside of the life field-

○井出純一[1]，横内憲久[2]，岡田智秀[2]，峰暢志[3]，安田峻[3]
*Junichi Ide[1], Norihisa Yokouchi[2], Tomohide Okada[2], Masashi Mine[3], Shun Yasuda[2]

Abstract: This study aim is to clarify attractive local resources and their characters in Dodogane and Okasezawa areas of Oi-cho, Ena City. As a result, this paper clarified six view types and those characteristics of mountains (Mt. Kasagi and Mt. Ena) in this district.

１．背景および目的—わが国では，全国で 360 団体が景観計画を策定(平成 25 年１月現在)しており，地方都市においても景観まちづくりが活発化している[1]．しかし，これまでのところ景観計画や景観まちづくりの議論は，歴史的資源や観光資源など知名度の高い地域資源が注目されがちである一方，名高い地域資源に乏しく歴史も浅い新興住宅地等においては，良好な景観形成を図るに当たりどのようなアプローチを展開していくべきかという議論が大きな課題になっている．

この点につき，本研究で対象とする岐阜県恵那市大井町土々ヶ根･岡瀬沢地区(図１)もまた，地域性に乏しく地域資源が明確になっていない，いわゆる「住民にとって特徴のない地域」である．こうした中，当地区はリニア中央新幹線軌道整備やそれに伴う建設道路整備とともに，白地地域への住宅建設が進展しており，当地区の何を保全し何を創造するかといった方針決定に迫られている．こうした地域性が希薄な地方都市において，日常生活の中で好まれている眺め(日常景)を活かした景観形成方策を検討することは，地域の良好な住環境を形成する上で必要不可欠と認識する．

そこで本研究では，上述した地区を対象に，良好な景観形成方策を検討するため，本稿では景観資源の抽出方法とその特徴について導出することを目的とする．

２．研究方法

（１）生活領域調査ー上述のように，当地区は住民が共有する地域資源が明確でないため，本研究では，日頃より当地区のまちづくりに携わり当地区に関心の高い区長および自治会長ら全24名を対象としたヒアリング調査を実施した[2]．この調査では，まず議論の中心となる地域拠点が曖昧であるため，「日常生活の中で身近な地域範囲」(生活領域)を捉えた．次に，住民が共通して大事にしていきたい景観(生活領域内の景観)，また生活領域外でも個人が大切に思っている景観(生活領域外の景観)およびそれらの視点場を尋ねた．その結果，当地区の好ましい景観として，身近な近景としての住宅風景は全く挙がらず，遠景の山岳の眺望(恵那山，笠置山，御嶽山)に評価が集まった[2]．

（２）各視点場における景観構造分析—上述した調査結果を基に，本稿では表１の調査で撮影・記録できた２視対象(恵那山，笠置山)とそれらを眺める24視点場※1に着目する．この２視対象は多様な視点場から評価されていることから，視対象の構図が重要であると考え，全24視点場において表１に示す方法で視対象を撮影・記録し，各撮影画像をメッシュ分割して，視対象の見えの大きさをメッシュ数で比較した．そして，視点場の周辺状況や視点場と視対象の中間領域の状況からそれらの構図を分類した結果，「生業型」「視線誘導型」など６つを得た．そこで以降では，全24の視点場ごとの視対象および各型の特徴について考察する．

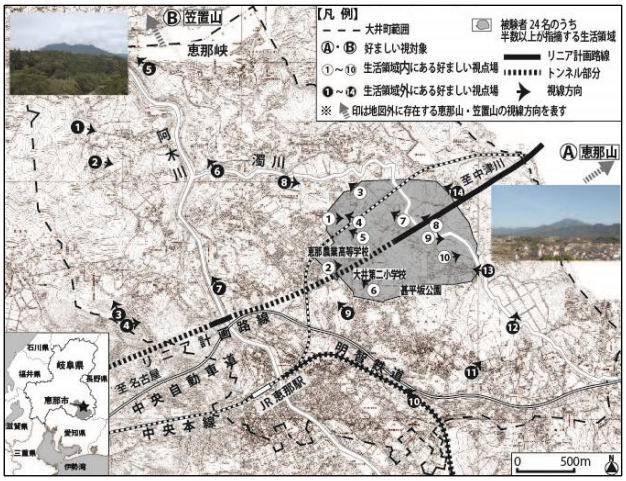


図１　調査対象地区の「生活領域」とその内外に分布する恵那山と笠置山に対する視点場

表１　視対象・視点場の写真撮影のための現地調査概要

実施日	2014年６月26日(木)～６月29日(日)，８月４日(月)～８月６日(水)
調査内容	住民が指摘した各視対象・視点場の構図分析のための現地調査(図１)
調査方法	・視点場の存在の有無を把握するため，各視点場を視察する． ・地域住民が指摘した好ましい景観の全視対象・視点場をカメラで撮影． ・人間の平均の見えの高さ150cmに固定し，人間の静視野の範囲である60°の倍率に設定する． (※御嶽山は視界不良のため，考察対象外とした)

１：日大理工・院・不動産　２：日大理工・教員・まち　３：日大理工・学部・交通

３．結果および考察—本調査で得られた２視対象（恵那山，笠置山）の各視点場の分布状況を図１に，表１の方法で得られた各視点場から見える視対象の見えの大きさの分布を図２に，また，前述した６つの型の特徴および該当視点場・該当写真例等を表２にそれぞれ示す．

（１）生活領域内外における見え方—図２より生活領域内外の視対象の見えの大きさの分布をみると，生活領域外（図中●数字）の視対象よりも，生活領域内（図中○数字）の視対象の方が大きく見える傾向を捉えた．

そこで以降では，こうした結果が得られた要因として構図の特徴が影響していると考えられるため，６つの各型の特徴について述べていく．

（２）生活領域内外における各型の構図の特徴—表２より生活領域内は全９視点場（例外を除く）のうち，「生業型」が６視点場と大部分を占め，生活領域外全 13 視点場（例外を除く）では，「生業型」および「視線誘導型」が共に４視点場と最も多い傾向を捉えた．その要因として「生業型」は人為によって手入れが行き届いた整地であることから，山岳の大きさに関わらず視対象を明瞭に捉えやすいためと考える．生活領域外の「視線誘導型」については，相対的に小さく見える山岳ながらも，道路の線形により視線が誘導されやすいためと考えられる．特にその道路の特徴は，広幅員の幹線道路であることから，生活領域外においてアクセスが良好であり，生活領域外でも比較的発見が容易な視点場である．

その他の型の特徴として，「道路横断型」は広幅員の道路を介することで山岳が良好に一望できる特徴を持ち，「緑俯瞰型」「住宅俯瞰型」は樹林地や住宅地など垂直に立ち上がるものが眼前に位置しながらも，俯瞰によってそれらの高さが緩和されることで，山岳の眺望が明瞭に捉えられる構図である．「スリット型」は生活領域内ながらも相対的に小さく見える山岳であるが，「視線誘導型」と同様に樹林地によって視線が誘導される構図である．

以上より，山岳を眺望する際，比較的視対象が大きく見える視点場は，中間領域が田畑や幹線道路などにより水平性が卓越することから良好な山岳景観が享受できる一方，山岳が小さく見える視点場であっても「視線誘導型」や「スリット型」のような道路や樹木により山岳が際立つことで，当地区の住民らが好ましい眺望として山岳を視認する特徴が捉えられた．

４．注釈（※１）２視対象とは，図１に示す「Ⓐ恵那山」「Ⓑ笠置山」であり，24 視点場とはその２視対象を眺望する全視点場である

５．参考文献

［１］国土交通省 HP http://www.mlit.go.jp/（閲覧日：2014. 9 .24）
［２］井出ら：「岐阜県恵那市大井町における生活領域と景観資源に関する研究」，土木学会，土木学会土木計画学研究発表会（CD-R）2014. 6

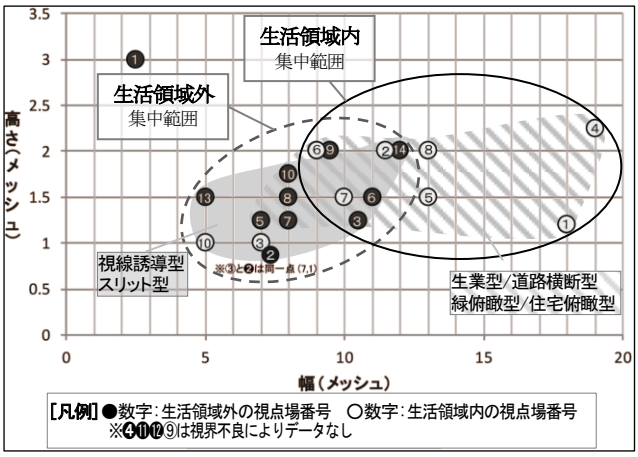
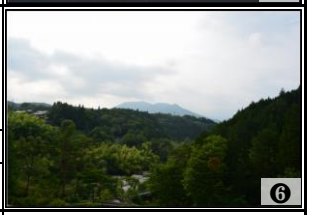


図２　各視点場における視対象の見えの大きさ

表２　各型の特徴と生活領域内外ごとに示した該当視点場および該当写真（一例）

分類	分類概要 視点場番号　※（）内は視点場数		該当写真例（一例） [数字]は視点場番号を示す
生業型	地域の主要な産業風景（当地域では第１次産業）が手前にある構図. 田園風景から多く見られた.		④
	生活領域内（6）	生活領域外（4）	
	①④⑤⑦⑧⑨	❶❽❾⓬	
視線誘導型	道路等，線形のオブジェクトによって手前から奥へ視線が誘導されている構図.		②
	生活領域内（1）	生活領域外（4）	
	②	❸❼❿⓭	
道路横断型	道路が左右方向に広がることで，視界の水平性がうまれ，視対象の垂直性が周囲に対して卓越することで，それを際立たせる構図.		③
	生活領域内（1）	生活領域外（1）	
	③	❷	
緑俯瞰型	俯瞰時に視対象まで緑が連続的に連なることにより，視対象と中間領域に一体性が感じられる構図.		 ❻
	生活領域内（0）	生活領域外（2）	
	－	❺❻	
住宅俯瞰型	俯瞰時に建築物の水平性が保たれるため，視対象の垂直性が周囲に対して卓越することで，それを際立たせる構図.		⓫
	生活領域内（0）	生活領域外（2）	
	－	❹⓫	
スリット型	景観の左右方向を絞り、視対象の印象を際立たせる景観構造. この要素として，当地域では樹木が見られた.		⑩
	生活領域内（1）	生活領域外（0）	
	⑩	－	

※視点場番号⑥⓮は特徴が捉えられなかったため，考察対象外とした